



| | |
|--------------|---|
| Title | 山の哲学・文学・芸術的側面と登山の魅力-A.v.ハラ ーの「アルプス」に始まる開かれた山々- |
| Author(s) | 遠山, 義孝 |
| Citation | 明治大学教養論集, 435: 219-243 |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/7111 |
| Rights | |
| Issue Date | 2008-03-31 |
| Text version | publisher |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| DOI | |

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

山の哲学・文学・芸術的側面と登山の魅力

— A. v. ハラーの「アルプス」に始まる開かれた山々 —

遠山義孝

I はじめに

当代随一の登山家ラインホルト・メスナーは「登山は人生の学校である」と語っている。彼が人生の縮図に例えた登山は他のスポーツとは異質のもので、あらゆるスポーツを超越しているといっても過言ではない。つまり登山の長所は、他のスポーツと違って「競争」ではないことである。もっとも最近では山岳マラソンのような競走もあるが、それは例外といえよう。各自が自分のペースにしたがって山頂を目指す、それが強いていえば登山のルールである。登山には経験と知識が必要であるが、高い山ばかりが尊いわけではない。山の高い低いで登山の厳しさが異なることはないし、低い山には低い山なりの魅力が十分にある。そのためであろう、登山ほど魅力豊かな文学や芸術（絵画・音楽）を生んだスポーツは他には見当たらないのではなかろうか。私は長年の哲学・ドイツ文学の研究過程で、洋の東西を問わず少なからぬ文学者や思想家、芸術家が山をテーマに、あるいは山を媒介に作品を残していることを知った。

ヨーロッパ圏で「山と文学」の系譜をたどる場合、ペトラルカを嚆矢として、ハラー、ルソー、ゲーテの3人の名が登場する。いずれもアルプスと関わりのある作品を残した文学者たちである。特に A. v. ハラーの長編詩「ア

ルプス」(1729年)は、それまで醜い岩と氷の塊とされてきたアルプスが実は美しいものであることを主張して、中世以来の負のイメージを一変させた画期的な作品であった。これが後年の近代アルピニズムに連なっていくのである。日本には古くから信仰登山があったが、明治期の登山は西洋思想の移入という形で広まった。信仰登山からの断絶としての、つまり登山の新形態としてのアルピニズムの誕生といってもよかろう。それから100年有余、日本は登山大国になった。昭和30年代の若者中心の登山ブームがあって、最近は中高年の登山ブームがいわれている。昔に比べて高山へのアプローチが容易になったことや、クライミング装備が軽量化し、さらに登山路や山小屋も整備され、より快適な山行と宿泊が可能になったこともこの現象に与っている。

私は山が好きなふつうの人間で、自分では登山愛好家を認めている。原則として深田久弥の『日本百名山』の世界の逍遙者である。つまり、深田の百名山は夏山の世界であり、沢登りや冬山は扱われておらず、頂上までの道が通じている山々が対象である。どの山も道が存在するのであるから、体力と忍耐力、それに若干の技術力さえあれば誰にも登ることができるのである。加えて深田の書には、単なる山行の記録ではなく、それぞれの山に関する歴史的、哲学的考察がある。だからこそ中高年にかくも人気があるのであろう。このような文脈の中で、つまりプロの登山家の目ではなく、中高年登山者の目から見るといふ文脈の中で私は年来「登山の文化誌」なるものを構築できないものかと考えてきた。登山の「文化史」ではなく「文化誌」としたのは、その基盤に歴史をも包含する「山の哲学」を据えたいからである。そのため、先ずは現在までの自分の登山体験の範囲から得た実践的知見を基に、ここに「登山の文化誌」事始めともいふべき大まかなプロレグーメナを発表したい。

先に私は登山家ではないと述べたが、しかし山には大いに縁があると思う。名字の遠山もその一つであるが、山国信州の松本生まれの松本育ちという出自もそれである。周りを山に囲まれた信濃の自然の中で育ったという背景が

ある。山が当たり前というこの感覚を、郷土の先輩臼井吉見が「幼き日の山やま」の中で以下のように叙述している。

宇野浩二に「山恋ひ」という中篇小説がある。諏訪芸者と、作者とおぼしき主人公との古風な恋物語である。この主人公が、諏訪の宿屋の窓から、あたりの山々を眺める場面が小説のはじめに出てくる。湖水の西ぞら、低くつづく山なみの上から、あたまだけのぞかせている一万尺前後と思われるのを指して、あの高いのは何という山かね？ ときかれた番頭は、さあ？ と首をかしげる格好をして、たしかに高い山のようにですが、名前は存じませんという。木曾の御嶽ではないのかねとかさねて訊くと、さあ、そうかもしれませんね、ともう一度首をひねってみせる。君はここごろ、どこかよそから来たのかね？ と問うと、いいえ、私はこの町の生れの者でございます、と答えて、気の毒そうな顔つきをするのである。

この小説の書かれたのは大正の中頃だが、当時の読者だって、この番頭変わってると思ったにちがいない。いまの読者なら、なおさらのことだ。信濃のように、まわりを幾重にも山にかこまれている国では、この番頭のようなのは、当時としては、決して珍しくはなかった。むしろ、あたりまえだったといってよい。生れたときから、里近くの山に特別に馴染んでいるので、奥の高い山などには、とんと無関心で過ごしてしまうのが普通だった。わらびを採り、うさぎを追い、きのこを探し、すがれ蜂を釣ったのは、みんな里近い山でだった。近くの山なら、松茸は、どここの松の根もとだとか、うさぎの道は、どこそこの藪かげだとか、知識経験の豊富な蓄積があった。おとなたちが、木を伐り、薪を集め、炭を焼くのも、これまた近くの山だった。

現に信濃で生まれ、信濃で育った僕の生家などは、あまりに山に近いので、前山のつながりの一つ奥の、一段と大きく高い鍋冠山が威張ってい

て、その肩のあたりに、てっぺんだけをのぞかせている常念岳にさえ気がつかなかったのである。常念岳の存在が大きく僕の前に姿を現してきたのは、小学校の三年生のときからである。三年生のとき、新しい校長がきた。なりは小さかったが、目は鋭く、黒いあごひげが胸の半ばまでたれていた。この校長は、月曜日の朝礼には、校庭の壇上から、毎回、常念を見よ！ と呼びかけた。常念を見ろ！ 今朝は特別よく晴れている、あんな美しい山はない、とか、常念を見ろ！ 今朝はいたってごきげんがいい、あんな気持ちのいい山はない、とか、今朝は曇って常念が見えないのが残念だ、とか、常念を見ろ！ あれはことしはじめて降った雪だ、とか、きまって常念の話だった。

僕の家からは、頭のとっぺんしか見せていない常念岳が、小学校では、西ぞらに大きく立ちほだかって、その全容を誇示しているのであった。僕らは、いつのまにか、教科書やノートに、南安曇郡常念小学校、何学年何組、何のなにがしと書きこむようになっていた。

常念校長の呼びかけによって、僕らはこれまでとはまったくちがった思いを山に寄せるようになった。おおげさにいえば、常念岳によって、新しい精神の世界を発見したのである。常念岳は、わらびや、きのこや、栗や、小鳥や、うさぎの山とは、まったく別の山であった。それは眺める山であり、仰ぎみる山であった¹⁾。

山がありすぎて山の名に無関心というのは私の子ども時代には共通感覚ともいえるものであった。ようやく中学生になって高山（の名）に対する関心が生まれ、感覚によって受容されていた存在物が悟性によってその名を得るようになったのである。私の通っていた中学校は松本市の北の高台にあり、雨天、曇天でなければピラミッド型をした常念岳を望むことができた。臼井吉見のこのエッセーに出てくる常念岳である。この山は姿かたちがすばらしいだけでなく、常念という名前がいい。実に哲学的ではなからうか。常念

岳は松本・安曇平に住む者にとってまさに der Berg（定冠詞付きの山）であった。後年ドイツに留学した時も、目をつむればいつでも西山の常念や東山の美ヶ原の姿が心に浮かんだものである。

II ペトラルカ、ハラー、ルソー、ゲーテ

世界最高峰のエヴェレストを始め、今やヒマラヤ山脈の 8,000 m 峰 14 座はすべて征服され、冒険（探検）をともなった登山行為であった処女峰征服の時代は去ったといってもよい。もちろん、世界には未踏峰の山々はいまだ数知れない。特に中国・チベット地区には 7,000 m 級の、また南アメリカにもまだ多くの未踏峰が手つかずにあるといわれている。

第 2 次大戦後、ヒマラヤ初登頂競争時代が始まったが、それ以前は世界の登山界にとっては、ヨーロッパ・アルプス²⁾が主舞台の時代であった。アルプスの峰々が征服され始めてから、まだ 200 有余年しか経っていないのである。近代的スポーツとしての高峰登山、いわゆるアルピニズムの出現はそれゆえ比較的新しい。

紀元前 3 世紀初頭 (B. C. 218) には、ローマの敵カルタゴの将軍ハンニバルが象を引き連れてスペイン、フランス経由でアルプスを越えたことが伝えられている。また、旧約聖書にはイスラエルの民を率いてエジプトを脱出したモーセが、神エホバから十戒を授けられるシナイ山の話も登場する。シーザーは『ガリア戦記』を著したが、ローマ人もアルプスを越えてライン河まで遠征しているのである。日本でも信仰登山以前の縄文時代にすでに八ヶ岳に登頂した縄文人の痕跡が見られるという。したがって洋の東西を問わず、誰がいつ最初にどの山に登ったかなどの具体例は知れるものではない。

自然の中の存在物である「山」に関する記録が具体的に現れてくるのはヨーロッパでは 13 世紀以降、つまり日本の鎌倉、室町期頃といってもよい。ダンテ (1265~1321) の『神曲』には、アルプスの峻厳なる嶺々を描写したと思

われる箇所がいくつか登場する。ルネッサンス期になるとレオナルド・ダ・ヴィンチ (1452~1519) などが実際にアルプスの山々を描写しており、アルプスを描いた彼のパステル画などは現在イギリスのウインザー城に所蔵されている。ピーテル・ブリューゲル (1525/1530~1569) の「雪中の狩人」(1565) には背景に切り立った険しい山々が描かれている。アルプスの山岳風景を思わせるものである。16世紀にアルプスの高い峠を越えることはまだ危険の伴う冒険であったが、アルプスの彼方のイタリアに憧れてフランドルの画家たちがアルプス越えをしたようである。祖国の平野ばかりを見慣れていた彼らはアルプスの荒々しい光景に強烈な印象を受けたにちがいない。「雪中の狩人」の中で氷雪に覆われた冬の岩峰が描かれたのは画期的なことであった³⁾。

しかし、こと山行記に関してはなんとといってもペトラルカの名を挙げないわけにはいかない。イタリアの人文主義の詩人ペトラルカ (1304~1374) は、1336年4月26日に南仏のアヴィニオン近郊の Mont Ventoux ヴェントゥー山 (標高 1,912 m) に登頂し、後にその記録を『ヴェントゥー山登攀記』⁴⁾として残した。信仰のために登るとか、水晶などの鉱物を探すために登るのではなく、なんら実利とは関係なく、ただ山の上からの景色を眺めてみたい、山の頂上に立ってみたいと思って登ったのはペトラルカが初めてといわれている。近代登山の嚆矢とされるゆえんである。それは近代アルピニズムの幕開けより500年も早い。勿論、そのような人間は彼以外にもいたことであろうが、この詩人はそれを文書に書き残した点で他とは異なる。風の山といわれる Mont Ventoux の厳しさ、頂上よりの風景等は描写されているが、山登りの過程、途中どのようにして登っていったのかは書かれていない。副題に「自己の悩みについて」とあるように、このエッセイは放浪の詩人ペトラルカのむしろ内省の書である。この山行には、彼はアウグスティヌスの『告白録』を携帯しており、登り道での休憩のたびにこれをひもとき自らの過去を振り返っている。山岳関係者の中には彼が実際に山頂に立ったかどうかを

疑問視する向きもあるが、本書が山岳紀行詩文の先鞭をつけたことは疑いない。

それから時代は400年下って、先述のアルブレヒト・フォン・ハラー(1708~1777)の登場である。ハラー⁵⁾はベルン生まれのスイスの詩人で、本来は哲学者で自然科学者(医者、植物学者)であった。ただ現在では、彼の名はスイス・アルプスの山々に捧げられた長編詩「Die Alpen: アルプス」(1729)によってのみ知られるといってもいい。このドイツ語の詩は、ハラー自身のアルプス旅行の印象をまとめたものであるが、その内容のすべてが山について書かれた最初の作品であり、全編がアルプス賛歌になっている。アルプスの大自然を初めて文学の世界に引き入れた記念碑的作品ともいえるものである。アルプスはそれまで長いこと魔女や龍などの怪物の棲む寒くて恐ろしいところというイメージであったが、この詩の非常な成功により、これが転機となって新たにポジティブなアルプス像が誕生したのである。原詩Die Alpen⁶⁾は49連、490行からなる長い詩で後に教訓詩とか思想詩と呼ばれるもので、全編を貫くトーンは、都会の物質本位の生活に対置されたアルプスの民たちのもつ純朴さの称揚〔貧乏であることは幸せなのだ/アルプスにおける愛/自然の美と崇高〕である。都会における物質本位の生活が、人間の墮落と退廃の原因であるとハラーは考えた。そのような腐敗におかされないのは、高い山地に住む無欲な人々である。現在、文化人類学で分類されるところのホモ・アルピヌス(homo alpinus)である。欲得をはじめとする悪を人間に植えつけるのは物質である。アルプスには魂の安らぎがあり、都会の灰色の煙のかげもない。自然にとけ込んで日々の労働にいそむ山村の村人や牧人たちの世界にこそ理想とすべき人間の生き方がある。物質的に貧しい山岳地帯の人々こそ精神的な豊かさをもつというこの主張は一種の文明批判でもある。

それまで恐ろしい醜悪な岩と氷の塊りとされてきた山々が実は美しいものであるということ、アルプスの住人たちが決して未開の山猿などではなく、

有徳なつましい民であることをハラーは描いてみせた。「アルプス」というタイトルに魅かれ読み始めると登場する山名はシュレックホルン (4,078 m) とゴットハルト (2,108 m) の二つだけで、がっかりする登山家もいるかもしれない。しかし、ハラーのこの詩のお蔭で悪魔や龍などの怪物が棲むというアルプスのイメージが拭い去られ、その後のアルピニズム (いわゆる高所登山) 誕生への道が開かれたのであった。モンブラン (4,807 m) の初登頂 (1786) は約 60 年後のことであり、ウインパーがマッターホルン登頂に成功 (1865) したのは約 130 年後のことである。

ハラーの自然科学者としての合理的な視点が悪霊や魔物の棲むという迷信を追い払ったといってもいいであろう。アルピニズムも近代科学とともに始まったのである。

中世以来、里と山頂、つまり平地と高山はつながりのない別々の世界と思われてきた。彼は望遠鏡での観察の結果、今から見ればごく当然のことではあるが、平地と山が途切れることなく連続していると主張したのである。長編詩「アルプス」は、ハラーが亡くなるまで、30 回もの版を重ね、数ヶ国語に翻訳されている。この詩の核心部分である 49 連目を以下に紹介しておきたい。

おお、幸いなるかな！ 汝ら、自分で育てた牛で
先祖から受け継いだ畑地を耕作する者
ほんものの羊毛を身にまといブナの冠で頭を飾り
甘い牛乳でつくった自然の料理を楽しむ者
西から吹くそよ風とひんやりする滝のもと
やわらかな草の上でなんの心配もなく眠りにふける者
外海の荒波の猛り狂った海鳴りや
戦争のラッパの響きに起こされることのない者
今の状態を愛し決してそれより良くなることを望まない者！

幸せとは豊かな生活を今以上に増やしたくない気持のことである⁷⁾

「アルプス」は、ヨーロッパ中の多くの人々に読まれたのであるが、中でも同時代の、同国人ジャン＝ジャック・ルソー（1712～1778）に与えた影響は大きい。ルソーは1761年に「アルプスの麓の小さな町に住める二人の恋人の手紙」という作品を発表、その中でスイスのレマン湖とその周りのロマンティックな野性的な美しさ、それにアルプスの寒村の風習や住民の純朴さを謳いあげた。これは、ルソーの「自然に帰れ！」思想の原点でもある。そしてこの書簡小説は後に『新エロイズ』と改名して18世紀最大のベストセラーになった。この小説ではアルプスの高山ではなく、アルプス前衛の山々、山麓の緑の谷、美しい絵のような村が点在する湖、絶壁にかかる滝などが魅力的に描かれている。そのお陰でスイスの山々が一挙に注目を集めるようになったとも言われている。先ず最初に裕福なイギリス人たちが山岳の野生美と崇高さを求めてスイスにやってきた。前述のイギリス人ウインパーのマッターホルン初登頂は、この小説からは約100年後のことである。イギリス人の海外登山はスイス時代を経て次のヒマラヤ時代へと続いていく。

ドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832）は、生涯に3度スイス旅行を行っているが、1784年にはゴットハルト山（峠）での感動をもとに、「君よ知るや、かの山と雲の懸け橋を？」で知られる「ミニヨンの歌」を作詩している。ゴットハルトはそれ以後あまねく知れ渡ることになった。ゲーテは、アルプスの山ではないが、ドイツ本国のハルツ地方にあるブロッケン山（1,142 m）には生涯に何度も登っている。4月30日の夜から5月1日にかけての「ヴァルブルギスの夜」に魔女たちの酒宴が催される山である。ヴァルブルギスの夜はゲーテの『ファウスト』にも登場して有名である。ブロッケン山は日本ではブロッケン現象（ブロッケンの妖怪）の山として知られている。

現在は登山電車（SL）に1時間40分ほど乗れば頂上に到着するが、私は

一度、ゲートを偲んで、麓から頂上まで歩いて登ったことがある。深いタンネの林の中、ところどころ氷河期の名残りのモレーンがあってドイツらしい静かな山であった。何よりもブロッケン頂上から見下すハルツ山地の眺めがすばらしい。デンマークの童話作家アンデルセンもブロッケン登頂体験を記している。ハイネの『ハルツ紀行』もブロッケン山を中心とするこの地域の山行記である。ドイツではブロッケン山は、最高峰のツークシュピッツェ (2,963 m) よりも有名で多くの文学作品に登場する。

Ⅲ 日本アルプスの登場

本場のアルプスの来歴については以上として、今度は日本のアルプスに目を向けてみたい。今や「アルプス」は日本人あこがれの言葉の一つになっている感じである。2003年には日本で2番目の高さを誇る北岳や甲斐駒ヶ岳の麓の芦安村が合併によってその名も「南アルプス市」と改名した。初めての外来語を冠したカタカナ市名の誕生である。アルプス (Alps) は英語で、独語はアルペン、仏語はアルプであるが、語源については定説がなく、「山」や「高い所」を表すケルト語であるとか「白」を表すラテン語など諸説がある。「日本アルプス」という呼称の登場は、明治14年(1881年)の英国人技師ウィリアム・ガウランド著『日本案内』にさかのぼる。ガウランドは考古学者でもあって、日本各地の遺跡の発見にも関わっており、現在その業績が明治大学考古学博物館に保存されている。ガウランドの後、英国人宣教師ウォルター・ウェストン(既にスイスのマッターホルンなどの山に登った経験あり)が本国で山行記『日本アルプスの登山と探検』(1896)を出版したことによって知られることとなり、またウェストンの周りに集まった小島鳥水らが山々の魅力とその名称「アルプス」を普及させたといわれている。日本における本格的なアルピニズムは1905年の日本山岳会創設により始まったといってもいい。同じ年に日本最初の山小屋である白馬小屋が建設され営

業を開始している。103年前のことである。ちなみにアルプス最古の山小屋（避難小屋）はシャモニーのモンタン・ヴェールにある。1776年に建設され、232年後の現在は営業はされていないが、石造りの建物が文化財として保存されている。ナポレオンの王妃ジョセフィーヌ、それにゲーテ、ヴィクトル・ユーゴー等もラバ（Maultier）に乗って登ったといわれる「ラバの道」（標高差900m）が今もこの山小屋に通じている。

日本では、古来山に神が宿ると信じられ、その線上に信仰登山の長い歴史があった。ウェストンらが主唱した登山は近代科学の合理主義と結びついたものであったから、ここに信仰登山からの断絶としての近代アルピニズムが誕生したのである。つまり明治の登山は西洋思想の移入と同時に展開し、その結果、登山と自由（西洋思想の核心）という概念が結びついたといえよう。

スイスというヨーロッパの小国が、アルプスの山々や自由の闘士「ウィリアム・テル」の物語を通して日本人に身近なものとなった。明治10年代に起こった自由民権運動において植木枝盛が自由のために戦ったウィリアム・テルを歌にしたことから（新体詩『瑞西独立』、『民権田舎歌』1879、『自由詞林』1887）、スイスの名が次第に浸透するようになったらしい。

ちなみにドイツの劇作家シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』は、巖谷小波によって『瑞西（すいっつる）義民伝』という名の歌舞伎劇に翻案され、東京の明治座の舞台にのせられている。明治38（1905）年のことである。江戸時代の日本に話を移し、弓の名手が照蔵の名（当時はまだカタカナの地名や人名は通じにくく、シェークスピアも漢語沙翁で表記）で登場、それはばかりではなく、代官の命令で息子の頭にのせられたのがリングではなく、柿だったようである。柿は日本古来のどこでも見かけることができ、誰でも知っている果物の代表格であった。リングを射るのが見せ場であるはずなのに、柿が選ばれたのは西洋リングが明治に入ってから輸入種で、当時、一般にはなじみがうすかったためと思われる。

スイス建国の英雄テルの存在もさることながら、この小さな国を一挙に有

名にしたのは、同時に紹介されたアルプスの存在であった。なぜウェストンたちは信濃と飛騨の境にまたがる山なみにアルプスの名を冠したのであろうか？ 単に高いだけではアルプスの名に値しないであろう。日本一高い山の富士山を、ウェストンも日本の登山家たちもアルプスには加えなかった。ちなみに富士山もスイスに移せば125番目の高さである。マッターホルンを連想させる槍ヶ岳（当時は槍ヶ岳が日本アルプスの最高峰とみなされていた）をはじめ、岩山のつくる景観がアルプス的と感じられたのだと思う。それに当時は上高地に牧場があって、最盛期には400頭の牛がいたといわれている。アルム（牧草地）があって、その上に峻厳なる山々がある構図はたしかにスイス的である。明治維新の廃藩置県は、藩有林から国有林へと所有の形態を一変させ、国有林を伐採せずに休養林としたため、杣（そま）仕事が唯一の生産手段であった村人たちは山をとりあげられてしまった。そのため、長野県は明治10年代に入って畜産を奨励し始め、その結果、各地で牧場経営が行われるようになった。上高地牧場の命運が尽きたのは、1934（昭和9）年北アルプスが「中部山岳国立公園」の指定を受けた時といわれている。上高地が畜産より観光をめざす方向転換を行ったためである。河童橋から明神を経て徳沢周辺に至ると今も牧場の名残を見ることができる。徳沢の牧場の番小屋は山小屋となって登山者を迎えいれている。これが井上靖の小説『氷壁』の舞台として知られることになる山小屋「徳沢園」である。

最初、飛騨山脈だけが日本アルプスとされたのは、アルプスの景観がそこにだけあると見なされたためらしい。赤石山脈、木曾山脈もその後南アルプス、中央アルプスとして日本アルプスの仲間入りをするが、最初のうちは飛騨山脈が中心であった。

ウェストンは『日本アルプス 登山と探検』の中で、「峰々には山腹に氷河こそないが、豊かな亜熱帯的植物から殆どアルプス的な雪まで揃っていて、ほかに何一つ欠けたものはない。富士の円錐形の紫の峰が白いマントを脱ぎ捨てた時でも、この〈飛騨山脈〉の偉大な花崗岩の巨人たちの多くは、なお

もその山腹に輝く雪の衣を纏っているのである」と記している。上田から松本に行く道筋で、槍ヶ岳（槍の峰）、常念岳、乗鞍岳の「気高い峰々」を見て感激した様子も描かれている。槍ヶ岳がマッターホルン、常念岳がヴァイスホルンに例えられているが、スイス・アルプスの山名はこの二つだけしか登場しない。信州が日本のスイスとされたのも、山に囲まれ湖（諏訪湖、白樺湖、木崎湖、青木湖等々）が点在することと、高山が数多くあり（3,000 m 以上の山 21 のうち、15 が長野県にある/アルプスの 4,000 m 以上の山 60 のうち、50 がスイスにある）、それに海に面していないことも関係があろう。山は、海が開放的なのに対して閉鎖的な側面を有していると思う。山国では山を越えた向う側への憧れと同時に「ふるさと」という感覚、つまり郷土意識が醸成されるようである。1899（明治 32）年に松本出身の浅井湧が発表した『信濃の国』（作曲北村季春）は小学校唱歌として採用された。現在、この歌は長野県の県歌になっているが、郷土の自然の中での無意識ともいえる連帯意識を生んでいる。その 1, 2 番を紹介したい。

1

信濃の国は十州に 境連らぬる国にして
 聳ゆる山はいや高く 流るる川はいや遠し
 松本伊那佐久善光寺 四つの平は肥沃の地
 海こそなけれ物さわに 万足らわぬ事ぞなき

2

四方に聳ゆる山々は 御嶽乗鞍駒ヶ岳
 浅間は殊に活火山 いずれも国の鎮めなり
 流れ淀まずゆく水は 北に犀川千曲川
 南に木曾川天竜川 これまた国の固めなり

「四方に聳ゆる山々は御岳、乗鞍、駒ヶ岳、浅間は殊に活火山、いずれも国の鎮めなり」とあるが、これらの山々はいずれも信仰登山の対象とされた山ばかりである。穂高や槍ヶ岳が名指されていないのは、峻厳な高山はまだ一般の人々には閉ざされていたからである。信州では100年程前までは、里にある山（お爺さんは山に芝刈りにというときの山）と奥深い山々とは、言葉の上でも「山」と「岳」と区別されていた。古来、地元村民が「山」に登るといふ時の山は共同で利用する入会の里山を意味し、「岳へは登らねえ」といふときの岳はほとんどの場合、高山の藩有林であることを意味していたようである。ヨーロッパ・アルプスとは別の意味で里山と高山は非連続であったようである。だから、自分の県にあっても眺めるだけでいたような奥まった山々に都会から大勢の人々が登りに来ることなど、地元民には思いもよらなかったことといえよう。

勿論、最初は地図も整備されていない時代であるから、山麓でまず頼りにされたのは山仕事に従事していたそまびと杣人、きこりたちであった。信濃大町の百瀬慎太郎が「対山館」を拠点に日本で初の山案内人の組織「大町登山案内者組合」をつくり初期の岳人たちの世話をしたことは、現在、日本唯一の山岳総合博物館である「大町山岳博物館」で目にすることができる。大町は今でも岳都であるが、明治時代、北アルプスへの山行を目指した外来者が目をつけたのは針の木峠周辺であり、その地元である大町だったのである。1915（大正4）年、長谷川如是閑は、対山館から出発し針の木峠の巨大な雪渓を描写している。

山国信州ではすでにこの頃から生徒が集団で登る学校登山が実施されている。特にそれは松本平や伊那谷の小・中学校で盛んに行われ今に至る学校登山の長い伝統がある。新田次郎の小説『聖職の碑』で知られる教師と生徒が悪天候のために10名も死亡した木曾駒ヶ岳遭難事件の後も、大正、昭和を通じて実施された。私の時代は小・中とも最終学年は修学旅行であったが、小5の時には東山の美ヶ原、中1は1泊して蓼科山、中2は2泊3日で西山

の乗鞍岳登山と決まっていた。乗鞍には当時、今の山岳道路はなく、麓の番所から登ったものである。春、夏の遠足でも近くの山に登るのが常であった。したがって、遠足とは文字通り、遠くまで足を運ぶことだと思っていたから、後に上京して、東京の子どもたちが電車で遠足に出かけることを知り奇異に感じた。しかし、信州の学校登山の伝統も最近ではすたれつつあるらしい。山登りをする若い先生たちが少なくなったのと、県の教育委員会の指導で宿泊が1泊になってしまったこととも関連するようである。高山に登るには、やはり2泊の山小屋泊りが必要である。

IV 山の環境と安全登山

この100年の間に登山道も開発、整備され、山小屋も充実し、今や中高年者を中心とする第2次登山ブーム（第1次は昭和30年代）といわれている。文部科学省登山研修所の調べによると、日本の登山人口は現在約600万人と推計されており、レジャー産業などによるとこれが800万人ということであるから山岳国スイスの人口（400万人）の2倍近くに達するのである。これは世界に例を見ない特筆すべき驚異的な数字である。勿論、プロの登山家から登山愛好のハイカーまでを含めた数であるが、これだけ多くの人々をひきつけているスポーツは他にないと思う。

登山の効用はいろいろあるが、まず第一に挙げられるのは健康にいいということで、丈夫になり長生きする。現在でも肥満、高血圧、心臓病等のいわゆる生活習慣病に縁のない世界の長寿村の住民たちには、標高が高い所に住み、長時間肉体労働に従事し、食事が粗食であるという三つの共通点がある。形態的に、高所に登り、長時間重荷を背負って歩行し、粗食に耐えるという登山行為は、この長寿村住民の生活様式ともよく似ている。健康の維持、増進に山登りがいいとされるのも、これらの共通点との関連もあろう。今では登山は最高の「有酸素運動」という評価が定着し、ドイツなどではエアラウ

プテス・ドーピング (Erlaubtes Doping), つまり「許されたドーピング」といわれているくらいである。体脂肪を減少させるのに最適のスポーツともいわれている。

日本の山の特徴は、なだらかな山並みと緑の多いことである。そのためか、日本人の山登りには、山との親しみを深めること、自然への巡礼という面があると思う。高山植物の可憐さを愛でながら、ときに雷鳥に出会うときの心の和みはなんともいいようがない。

登山行為は多分に精神的な面を有している。現代ドイツの作家マルティン・ヴァルザーは『フィンク氏の戦い』の中で「高所での癒し」(Höhengewinn)という新語をつくり、最後は主人公をスイスの山に登らせることで終わらせている⁹⁾。癒しを求めて山へという設定は、志賀直哉の『暗夜行路』にも見られる。主人公時任謙作の大山詣である。漱石の『草枕』の冒頭の文「山路を登りながらこう考えた」も、まさにその好例といえよう。黙々と山を登りながら、仕事や家庭などあらゆることを自問自答し、もう一人の自分と対話する精神的なスポーツといっても過言ではなからう。

ヒマラヤ 8,000 m 峰 14 座全部を単独無酸素で完登した現在世界最高の登山家ラインホルト・メスナーによれば、登山で最も重要なことは、目的の山に向かって常に適切な道を見つけることである。登山にはいわゆる「ルート・ファインディング」が必要ということであり、それが冒頭の「登山は人生の学校である」という名言を生んだのである。アルプスの山の日本との大きな相違は、アルプスには日本に無い氷河 (Gletscher) があるということ、氷河がなくても夏でも万年雪 (Firn), あるいは雪 (Schnee) があるということ、したがって道のないところに道を見つけて歩くことが必要不可欠であり、それはとりもなおさず判断力の要請につながるかと語っている。彼の生まれ故郷である南チロルのフィルネス谷から始まって無酸素でのエベレスト登頂までの登山人生を振り返って、「登山は人間の限界を意識する」最良の手段とも述べている。8,000 m の高さでは空気は平地の 1/3 しかないのであるから、

まさに人間の限界への挑戦である。その点、日本アルプスの山々は無積雪期、つまり夏山ならば体力と「3点確保」の技術があれば殆どどの山でも登ることができる。なぜなら、頂上まで道が通じているから、それに沿って歩いていけば上までの山行が可能なのである。本場のアルプスの高山は夏でも雪が降るから、夏山といえども状況は日本の冬山と同じである。かつて、私は日本では冬期にしかできない氷上訓練（Eiskurs）をスイス中部のズステンホルン山麓の登山訓練基地でドイツ人の若者たちと一緒に受けたことがある。日本では盛夏の7月であったが、そこは時々雪も降り吹雪にも遭遇した。1週間にわたる合宿訓練で、昼は氷河のトラヴァース、クレバス（crevasse, Gletscherspalte）に落ちた時の実地の引き上げ訓練、氷斧（ice ax, Eisbeil）を使っただけのアイスクライミング、アイステクニク（フロンタル・ツァック・テクニク）、ロープワーク、夜は天候観測、読図訓練とハードなスケジュールであった。周辺の山を出発地点から最後までアイゼンをつけ、アンザイレン（互いにザイルで身体を結び合う）しながら、氷河上の雪と氷だけのトレースをたどりながら登山をしたのは、この時が生まれて初めてであった。途中氷河湖があったが、水の色は緑白色（Gletschermilch）で、ほうれん草をすりつぶしたものに牛乳を混ぜたような不思議な色であった。そこから急登が始まったが、下から見上げたときにはこんなところを登れるのだろうかとも思った。氷河の始まりの部分は、小石や砂が表面に堆積して見た目には汚く映る。しかし登るにしたがってきれいな透明度の増した白色となり、クレバスの裂け目の氷は薄青色に変わる。実に神秘的な光景であった。

合宿中7人のチームでの集団登山で、私はちょうど真中に位置していたが、何よりも驚いたのは、日本では1時間で300mの高度を稼ぐのが一般的なのに、本場アルプスでは1時間に400mのテンポで高度を稼ぐのである。まったく登るスピードが違う。日本人は短足であるからそれだけでも不利なのにこの速さであるから、ゼーゼー、ハーハーと息があがり、心臓が飛び出るの

ではないかと思った。アンザイレンをしているので、自分だけ立ち止まって休むわけにもいかず、まさに死ぬ思いであった。講習の中日には、7月というのに雪が降り、雪雲がガス状に立ちこめ、視界全体が真っ白になって空間と地面との見分けがつかなくなるいわゆるホワイトアウト現象にも見舞われた。かつて八ヶ岳の硫黄岳でホワイトアウトに遭遇し、そのため遭難しかけたことを思い出し、一瞬怖い思いにとらわれた。幸いリーダーが経験豊かであるこの困難な状況から我々を救出してくれたのであった。彼は落着いて高度測定器と地図を取り出し、今どの辺にいるのかの確認を行い、山小屋への道に当たりをつけ不安そうな我々を導いてくれたのである。

過去に、ドイツ、オーストリア、リヒテンシュタイン、フランス、それにスイスの50近くの山々を登ってわかったことは、難易度は必ずしも高さとも関係ないということであった。アルプスの全体像をつかむべく、チューリヒ空港から「アルプス遊覧飛行」でゼンティスからモンブランに至るまでの全アルプスを上空から観察したことがあった。眼下には何千という峰々が縦横に走っており、日本の北、中央、南アルプスを東にしてもその何十分の一にもならないことを実感した。ドイツからイタリアまでアルプスは実に長大かつ広大ということである。ちなみにスイスの面積は九州とほぼ同じである。日本で特に有名なアルプスの3大名峰、アイガー、マッターホルン、モンブランも、全体の中で見たら点のようなものである。また、スイスやフランスの観光スポットでは登山電車やロープウエーが3,000 m以上の高さまで通じているため、登山者でなくても富士山(3,776 m)より高所に立つことができる。小マッターホルン(Kleinmatterhorn)は3,884 mの高さであるが、そこまで乗物が運んでくれる。先の三大観光地などを別にすれば、スイスのアルプス山行などは、北アルプスなどと違って一日中歩いても人に会うこともなく、実に静かなものである。スイスではヒマヤラ式の、つまりロープウエーなどを使わない文明化以前の登山をすれば、たいがい他のパーティーに会うことはない。時折、巨大な雪崩の爪跡に息をのみ、山道に落ちている葉

英や、突然の戦車の出現などに驚嘆することもある。スイスでは Miliz（国軍）が秋になると山岳演習を行うのである。

日本の夏山は誰でも登れるが、スイスでは、2,000 m 級の山でも先達が欠かせない。雪田やガレ場でのルートファインディングが必要なためである。

深田久弥の『日本百名山』が、中高年の登山愛好者のバイブルのようになってるのは、前述のようにいずれの山も冬山ではなく、また日本独自の登山形態といわれる沢登りも入っておらず、夏山に限られているからである。日本のマッターホルンとも呼ばれる槍ヶ岳について見てみよう。写真などで見ると一般の人はその槍の穂先のような尖った姿を見ただけで畏怖感を覚え、自分にはとても登れないと考えるにちがいない。ところが、体力とある程度の技術があれば普通の人でも登れるのである。単独行で名を馳せた加藤文太郎をはじめ多くの登山家が槍ヶ岳の北鎌尾根で墜死しているため、しぜん「山岳神話」ができあがって、山は怖いところというイメージが定着したようである。これは厳冬期の冬山の話で、しかも普通の登山愛好家の話ではなく、プロの登山家たちのことなのである。初めて槍の頂上に登った人は、感激のあまり、下界におりて、鎖や梯子があってすごく怖かったとか、頂上がいかに狭かったか等々、吹聴したがる。そうすれば、「あなたはすごいね」とか「君は大したものだ」と尊敬の眼差しを向けられ、今さら「この私だって登れたのよ」などと言い出せず、後に引けなくなってしまう。この事情は明治の頃から、あまり変わっていないようである。小島烏水の「槍ヶ岳探検記」（明治 35 年）は、当時かなりの反響を呼んだらしいが、いかに明治のこととはいえ、いささか誇張が過ぎて筆が滑りすぎたきらいがある。山に登ったことのない人々に「登山は危険なもの」「山は普通の人には近寄りたいたところ」と、かなりオーバーな印象を与えてしまったようである。その後、槍ヶ岳には芥川龍之介（「槍ヶ岳に登った記」明治 42 年）や歌人の窪田空穂ら文人が次々に登っている。高知出身の評論家・詩人の大町桂月は烏水の紀行文に対し痛烈な感想を寄せている。「槍ヶ岳高しといえども、高が知れた

る土の窟也。これしきの山に上るに、何だか命がけの旅でもあるかのように長々しく書かれたるは、ちと男子的でないように存じ候。これ貴兄のみならず文士の旅行家(=登山愛好者のこと)は、いずれも余りに神経的也、臆病也」。大町桂月は登山家としても知られ、1924(大正13)年南アルプスの農鳥岳山頂に立って詠んだ「酒飲みて高ねの上に吐く息は散りて下界の雨となるらん」は、現在歌碑となって東農鳥岳山頂(3,026m)に立っている。松本生まれの窪田空穂の槍ヶ岳の歌も紹介しておこう。「槍ヶ岳そのいただきの岩にすがり天(あめ)の真中(まなか)に立ちたり我は」。この歌は1913(大正2)年に槍ヶ岳に登頂した時の感動をうたったものである。彼自身の随筆によって同じ時期にウェストンや高村光太郎も登っていることが知れる。現在では、古文書が見つかって槍ヶ岳の初登頂者は播隆上人(1782~1840)であることが判明している。それは1828年のことで、日本アルプスの命名者ガウランドの登頂(1878)に先立つこと50年前の快挙である。播隆上人は実は近代アルピニズムの黎明を開いていたのである。この業績を顕彰して岳都松本の駅頭には播隆上人像が建立されている。

本場アルプスとの関連でいえば、1921(大正10)年には榎有恒によるアイガー東山稜(ミッテルレギ)の初登攀が行われている。榎たちがグリンデルヴァルトに無事帰還したときには村人たちが熱狂的に歓迎しその快挙を祝ったという。その後日本では一種のアルプスブームが起こったが、帰国した登山家たちの中には全山緑に蔽われたような日本の山を、なんとなく軽蔑する者も現れたようである。アルプスの森林限界は1,800mくらいであるが、日本では大体2,500mが樹林限界で、中には南アルプスの仙丈が岳などのように3,000m峰なのに頂上まで緑があるものもある。私は、特にハイマツ(這い松)が好きでハイマツを見ると心が癒される感じがする。そのため、岩だけしかないヨーロッパ・アルプスの山よりも日本の山の方が好ましい。昨夏、南アルプスの荒川岳から赤石岳へと縦走したが、小赤石岳から赤石岳の鞍部のハイマツ帯で雷鳥の親子を見かけた。最近では雷鳥の数が激減し、滅多に見

られないようなので殊の外嬉しかった。また赤石岳の頂上で黄色のトウヤクリンドウが一輪咲いており、心の洗われる思いがした。3,000 m を超える峰の上に花が咲いていることなどは、日本の高山でもごく珍しいことである。日本の山は、森林限界から、ハイマツ地帯になり、やがて岩だけの地帯へと変わっていく。向こうのアルプスにあって、こちらのアルプスにないものとして、氷河の例を挙げたが、逆に向こうになくて、こちらにあるものがハイマツである。日本の高山には欠かせないハイマツの茂る景観は、アルプスでは見ることができない。もっとも日本でも南アルプスの^{てかり}光岳がハイマツの南限で、それ以南の山にはハイマツは生息していない。

IV 山と環境問題

最後に山と環境、人々の暮らしと自然の問題を取り上げたい。中高年の登山ブームは悪い事ではないが、大勢の人間が夏場に大挙して押しかけるという現象を生み、その結果生じた山の荒廃が報告されている。「百名山」の功罪相半ばともいえよう。どの山小屋も特に糞尿処理に頭を悩ませている。昔はテントを張る幕営の場合は、「雉を射つ」「花を摘む」が当たり前であったが、現在はトイレのない場所では設営が不許可になっている。今後ますますこの問題は大きくなることと思う。南アルプスの塩見岳などでは、既に自分の出した排泄物は自分で持ち帰るというルールが導入されている。それに対してスイスの山小屋はトイレも水洗できれいである。スイスにできてなぜ日本にできないのであろうか。一つにはスイスの山小屋はいずれも有に100年以上の歴史があるためかと思われる。フランスにはまだ水洗でない、日本同様のゴットン便所を見かけることがある。日本の山小屋は長いこと3K（汚い、臭い、暗い）といわれてきたが、ここにきて水洗やバイオトイレをもつ山小屋も出始めている。

手本となるスイスにはまだ大地の恵み、手づくりの暮らしが残っている。

スイスのどこへ行っても観光と、その土地古来の生業とが両立している。牧場体験や農場体験を味わうアグリツーリズムもある。羊飼いの手ほどきで羊の世話をしたり、ヤギ、豚に餌をやったり、トウモロコシ畑で収穫の手伝い、それにチーズ作りに挑戦するなどである。生業と観光が両立しているところにスイスの強みがある。スイスの美しさはそれによって保存され永続していることを感じる。スイスの美しさは一朝にしてなったものではないのである。何世代にもわたって氷河で荒らされた土地から石を取り除き、緑の牧草地に変えていったのである。スイスはたしかに自然の美に恵まれている。しかし、忘れてはならないのは、その美しさの背景となるアルムも森も村も教会もすべて人の手によってつくられたものであるということである。スイスの美しさは作られた美しさといっても過言ではない。加えて、スイスという国は、都市は勿論のこと、どんな山奥に行っても社会資本が充実し民家は立派であるし、生活の豊かさが目につく。なぜかと考えてはたと気がついたのが、ナポレオン期以後この国が一度も戦争をしていないという事実である。スイスには長い間の富の蓄積があるのである。

日本にもまだまだ豊かな自然がある。一例として清流四万十川で有名な高知県を挙げよう。かつて私は自由民権運動の発祥の地を訪れた時、高知県が台風銀座で有名なため海の国のイメージを抱いていたが、実際は山国であることを実感した。「自由は土佐の山間より」はまさに至言であった。高知県は、北に四国山地が連なり、南には太平洋が広がるという山と海の両方をあわせもつ幸せな県だと思う。山から流れ出る水が川となって海に注ぎ、海から蒸発した水は再び雨となって山に降り注ぐ、いわゆる自然の一循環（サイクル）を実感できる恵まれた土地柄である。

このところ、地球の温暖化が急速に進み、世界的に異常気象が発生している。昨年日本の酷暑は記憶に新しい。ここ数年相次ぐ台風の襲来や大きな地震があったが、ヨーロッパの人たちを驚かしたのは猛暑や台風や地震よりも、秋になっての相次ぐ熊の出没だったようである。それは、熊が山から里

に出てきたという驚きではなく、日本のような高度工業国家にまだ熊が生存しているというニュースにである。アルプスでは野性の熊は絶滅し、ベルリンとかベルンなどの地名に Bär (熊) の名残りがあらくらいといえる。日本にはまだそれだけ自然が残っている証拠である。環境破壊の問題は、今後われわれが直面する大きな課題である。卑近な例では過剰包装によるゴミの問題がある。紙がむやみに費消され、マクロの視点からすれば、それは発展途上国の森林減少を生んでいる。森林減少は酸素減少と連動するのでせぬ山地荒廃にもつながるといふ悪循環を生んでいる。しかしなんといっても最大の環境破壊は戦争である。戦争はどんな理由づけをしようとも許されるものではない。スイスの例がいい教訓になると思う。登山ができるのも結局は平和あってこそのことなのである。登山は文字通りはるか遠くまで視野を広げてくれる。登山の大きな効用はそこにあるのではないかと思う。それは知らず知らずのうちに思考法にまで及び、最終的には山の哲学の誕生を期待させる。ここで言及できなかった山の詩や歌については後刻論じたい。

詩としては、上田敏訳、カール・ブッセの「山の彼方の空遠く」(Über den Bergen) や尾崎喜八の「美ヶ原」が、山という自然物に幸せや憩いを求める感情を謳いあげている。ドイツには昔からヴァンダーリート (Wanderlied) と呼ばれるハイキングや山歩きの際に歌う多くの歌がある。映画「サウンド・オブ・ミュージック」(1965) の「クライム・エブリ・マウンテン」もこの線上で「すべての山に登りなさい、谷川を渡って虹を追っていけば、夢はきっと見つかる」と歌っている。

井上靖の『氷壁』、新田次郎の『聖職の碑』、『孤高の人』、夢枕獏『神々の山嶺』などは本格的な山岳小説であるが、ドイツ語圏には山岳小説とは別にレニ・リーフェンシュタールやルイス・トレンカーによって始められた山岳映画の伝統もある。こちらはオーストリアのザンクト・アントンで毎夏開催される「山岳映画祭」に受け継がれている。絵画に関しては、ジョヴァンニ・セガンティーニ、フェルディナント・ホドラーを中心とした山岳絵画の研究

も楽しみである。私はかつてスイスのサン・モリッツにセガンティーニ美術館を訪ねたことがあるが、そこで見たアルプスの雄大な風景画の数々が今も忘れられない。

本論では「登山の文化誌」の導入部として、自分自身の実際に登った山々の登山体験を基に総合的なプロレゴメナを開陳したが、今後はさらに各論として文学、哲学、芸術の各分野の山との関わりを追究していきたい。

《注》

- 1) 白井吉見「幼き日の山やま」。『自然と人生』所収、筑摩書房、1990年、S. 147ff.
- 2) 本来アルプスは、ヨーロッパの山脈名であり、「ヨーロッパの」という付加語を前につけるのは Pleonasmus (冗語法) の感があるが、日本にも「アルプス」という名称が生まれ、それが今やすっかり定着したため、日本アルプスとの区別のために付加する次第である。
- 3) 森洋子「ピーテル・ブリューゲルの《牛群の帰り》《雪中の狩人》にみられるフランドルの聖務日課書、時禱書、月暦版画の図像的伝統について」『明治大学教養論集』2005年3月、394号、S. 10ff.
- 4) Francesco Petrarca: Die Besteigung des Mont Ventoux. Lateinisch/Deutsch. Übersetzt u. Hg. v. Kurt Steinmann, Stuttgart: Reclam 1995 (RUB; 887).
- 5) 日本の山岳関係者の間で知られるハラーは、カタカナ表記では同姓であるが、詩人 Albrecht von Haller とは別人で、オーストリアの登山家ハインリヒ・ハラー (Heinrich Harrer) のことである。ハインリヒ・ハラーは、ヘック・マイヤーとともに1938年アイガーの北壁初登頂に成功、その後の彼の冒険人生は映画化もされた „Seven Years in Tibet“ に詳しい。
- 6) ハラーは、1729年に長編詩「アルプス」を完成させたが、出版をしたのは1732年のことである。この間にも推敲したり書き直しを行い、出版後にも一部思想上の改稿を加えている。したがって、「アルプス」には異なる Version が存在する。翻訳にあたっては以下のレクラム文庫版「アルプス」を用いた。Albrecht von Haller: Die Alpen und andere Gedichte. Auswahl u. Nachwort v. Adalbert Eischenbroich, Stuttgart: Reclam 1965 (RUB; 8963).
- 7) アルブレヒト・フォン・ハラー「アルプス」(1729年): 遠山義孝訳『文学空間』vol. 5, no. 01, 2004年, S. 136
- 8) 遠山義孝『ドイツ現代文学の軌跡——マルティン・ヴァルザーとその時代——』明石書店、2007年、S. 176.

参考文献

- 芥川龍之介『河童 他二編』岩波書店, 1969年
ウェストン『日本アルプス 登山と探検』岡村精一訳, 梓書房, 1933年
大町桂月『桂月全集』桂月全集刊行会, 1926-29年
大森久雄『本のある山旅』山と溪谷社, 1996年
尾崎喜八『山の絵本』岩波書店, 1993年
冠松次郎『黒部溪谷』アルス, 1928年
串田孫一『山のパンセ』実業之日本社, 1957年
小島烏水『山岳紀行文集 日本アルプス』近藤信行編, 岩波書店, 1992年
近藤等『アルプスを描いた画家たち』東京新聞出版局, 1980年
佐貫亦男『佐貫亦男のアルプ日記』山と溪谷社, 1974年
志賀重昂『日本風景論』近藤信行校訂, 岩波書店, 1995年
高田宏『信州すみずみ紀行』新潮社, 1994年
田中澄江『花の百名山』文藝春秋社, 1980年
新田次郎『アルプスの谷 アルプスの山』新潮社, 1964年
深田久弥『日本百名山』新潮社, 1978年
槇有恒『山の心』毎日新聞社, 1974年
宮下啓三『日本アルプス 見立ての文化史』みすず書房, 1997年
百瀬慎太郎『山を想えば』百瀬慎太郎遺稿集刊行会, 1962年
山村正光『車窓の山旅 中央線から見える山』実業之日本社, 1985年
ラスキン『近世画家論』御木本隆三訳, 春秋社, 1933年

(とおやま・よしたか 理工学部教授)